



TITLE:

福岡縣の人口地理(略報)

AUTHOR(S):

金尾, 宗[平]

CITATION:

金尾, 宗[平]. 福岡縣の人口地理(略報). 地球 1927, 7(4): 299-306

ISSUE DATE:

1927-04-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183253>

RIGHT:

に種々なる地質學的事實より推論し、種々複雑な要素を副因子として考察に入れるのである。従つてジョーリー氏が與へたる數値は恐らく其の儘認容し得ざるものであらう。然し根本思想に至つては恐らく今日迄行はれたる種々なる地

質構造論說に比し劃世のものたるの觀を呈して居る。斯くて我々は地質學が近き將來において動物化石によつて生じたる生代を物理學上の數値を用ゐて取扱ひ得るに至るであらうことを豫期し得るものである。

福岡縣の人口地理（略報）

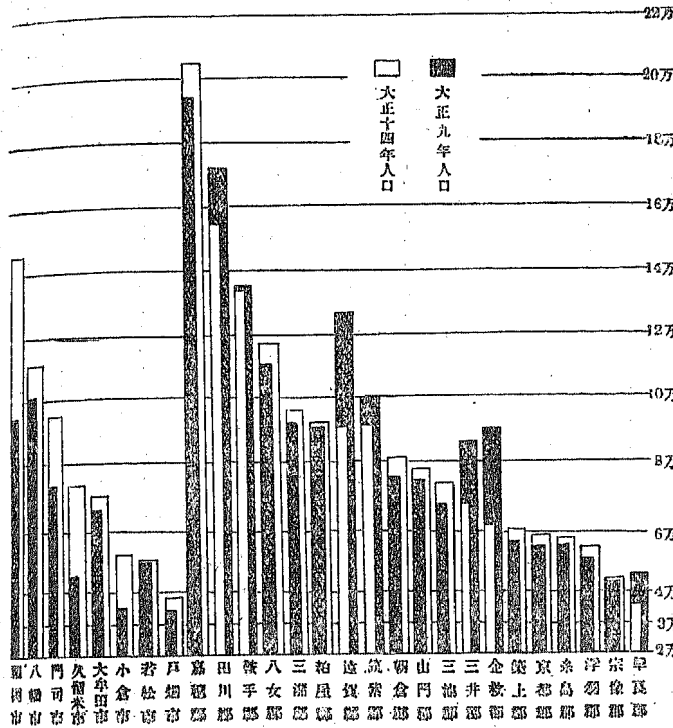
金 尾 宗 平

一、人口總數及其の分布

第二回國勢調査の結果に依れば本縣現在人口の總數は二、三〇一、六六八人で、東京（四、四八四、八四五）大阪（三、〇五九、五〇二）北海道（二、四九八、六九〇）兵庫（二、四五四、七八四）愛知（二、三一九、二四八）に亞ぎ内地で第六位を占めて居る、これが郡市別は別表の如く市部（人口六三九、二八六、總人口の二割七分八厘―第一回調査二割一分）では福岡の十四萬六千（今は八幡

村を市に合併して十五萬以上）を首位に戸畑の三萬八千を最下とし、郡部（人口一、六六二、三八二總人口の七割二分二厘）では嘉穂の甘藷を最多に早良の三萬六千を最少として居る。之れを第一回國勢調査の人口と比較すれば、縣下で一、一三、四一九人を増し（五ヶ年間に五分二厘―内地の平均六分七厘―年平均二二、六八四人を増加）東京の七十八萬を筆頭に大阪（四七）、愛知（二二）、兵庫、北海道、静岡、京都に亞いで内地で第八位となつてゐる事は漸次本縣の發展を雄

郡市別人口順位



辯に物語つて居る、郡市別では別圖の如く市部では福岡、久留米の膨脹最も著しく若松に至つ

ては殆んど變化がない、郡部では嘉穂の一萬を首位に宗像の六千を最少として十一郡は何れも増加せるに引かへ

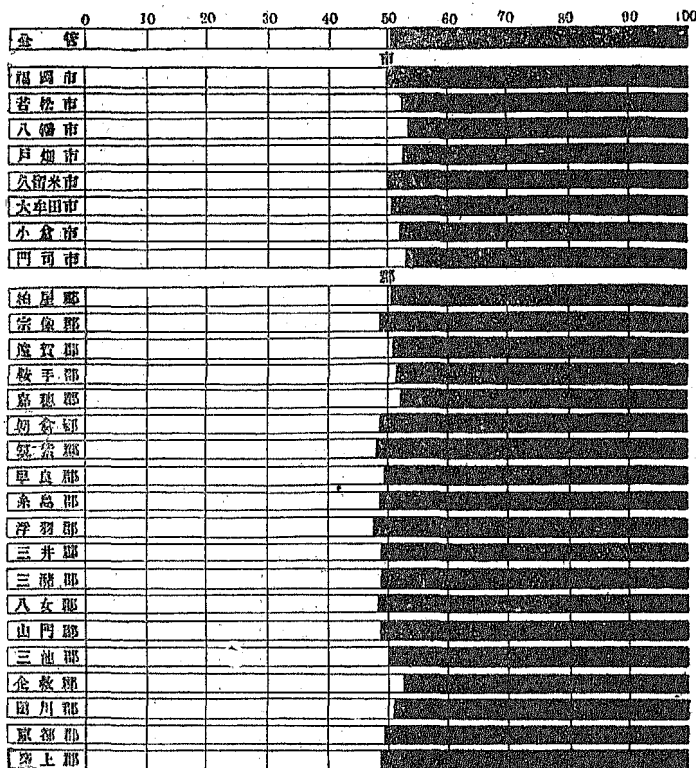
本籍人口	2,024,599人	現住人口	2,301,668人
在留外國人	485	出 寄 留	529,336
海外在留人	28,938	入 寄 留	822,905
送金人員	2,816	人口1000ニ付	
送金額	2,093,079圓	婚姻	11.15人
		離婚	1.11人
		生産	34.02人
		死亡	2.06人
		死亡	20.76人

遠賀の三萬五千早良の一萬筑紫の七千三井、企救の五郡は町村の市に併合の結果、田川、鞍手の如きは財界不況の爲め炭田地方の事業不振に因り、何れも減少を來して居る、而して前記増加の歩合は福岡市外四市の如き町村合併に因る増加を除外した自然増加では大牟田の六分一厘京都の八分一厘八女三

郡市別男女ノ割合 (百分率)

男

女



池の七分四厘浮羽の六分三厘嘉穂の五分一厘等を多き方とし、五分以下では三浦外四郡で若松の二分二厘宗像の一分四厘を最少とする。而し

て縣下の増加歩合平均五分二厘より大なるは大牟田、朝倉、浮羽、八女、三池、京都の一市五郡で、主として純農村を包有する郡部に増加割合の大なるは一般財界不況に伴ふ歸農者の増加に依る現象であらう。

二、男女の割合及

其の分布

次に男女別に就いて見ると男の多いのは内地で十六府縣、而も東京(女一〇〇人に付男一一四人)神奈川(一一〇)北海道(一一〇九)大阪(一一〇九)長崎(一一〇四)京都(一一〇四)に亞いで第六位となつて居る、(概して北海道、關東、近畿に多く沖繩、北陸、東山に少く中國は等位)即ち男一、二六六、一

六五人女一、一三五、五〇三人で男の女を超過する事三〇、六六二人、女一〇〇人に對し男一〇二人七で前回調査の一〇四に比し男の割合稍減少したのは、主として近年財界不況の爲め鑛工業の不振に伴ふ勞働者の移動に因るものであらう、之れを地方別に見れば筑前（四市九郡總人口一、一八七、〇七〇）は一〇四、筑後（二市六郡總人口六三一、一七二）は九八、豊前（二市四郡總人口四八三、四二六）は一〇六となり、筑豊地方に於ける男女の割合が本縣平均歩合を超過せるは主として筑豊炭田を扣へ諸工業の勃興に伴ひ多數の勞働者を包容せるに因り、之れに反し筑後の女多きは主として男の出稼行商等の關係に因るものであらう、更に細別して觀察すれば男の多きは八市七郡で、八幡、門司の兩市は一四で最高、戸畑は一二、企救（一一）嘉穂（一〇九）順次之れに次ぐ、女の多きは十二郡で浮羽の女一〇〇人に對し男九三人朝倉、筑紫、八女の各九五はその著しきものである、之れ亦都會地及び鑛山工場等を有する地方に男が

多くそれ等の四周の郡では男の出稼行商等の爲めに反つて反對の現象を呈するに至つたものである。

三、世帯總數及其の分布

世帯總數は四六一、六七四で第一回の調査に比し二二、〇三五を増して居る、中普通世帯四五七、〇一八、準世帯（旅店、下宿、寄宿舎、船舶等の如き）四、六五六で一世帯平均五人、内地平均も五人で平均より高いのは東北地方（五人九）北海道（五人三）北陸、四國（四人七）沖繩中國近畿（四人六）は低く東海關東九州は平均と等位、一道十九縣は平均よりも高く、二十三府縣はそれよりも低い、概して大都市を包有する府縣の世帯は小で、地理的には東北日本に大で西南日本に小な様である、縣下で之れを郡市別にしてみると平均より高いのは、久留米の五人四、福岡の五人二其の他市は五人以下、最少は門司八幡若松の四人四、郡部では三井三瀬朝倉の五人六、筑紫八女の五人五、山門糸島早良粕屋は

何れも五人以上、遠賀外六郡は五人以下、田川嘉穂の二郡は四人七で最少、概して都會地及工場鑛山等を包有する郡市は世帯が小で、然らざる地方は比較的世帯の大なるものが多い、之れを前記の男女別から見ると一般に男の多い地方（炭坑地方の如く）は世帯が小さい事となる。

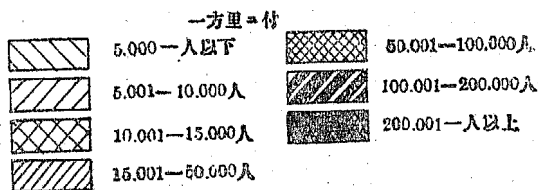
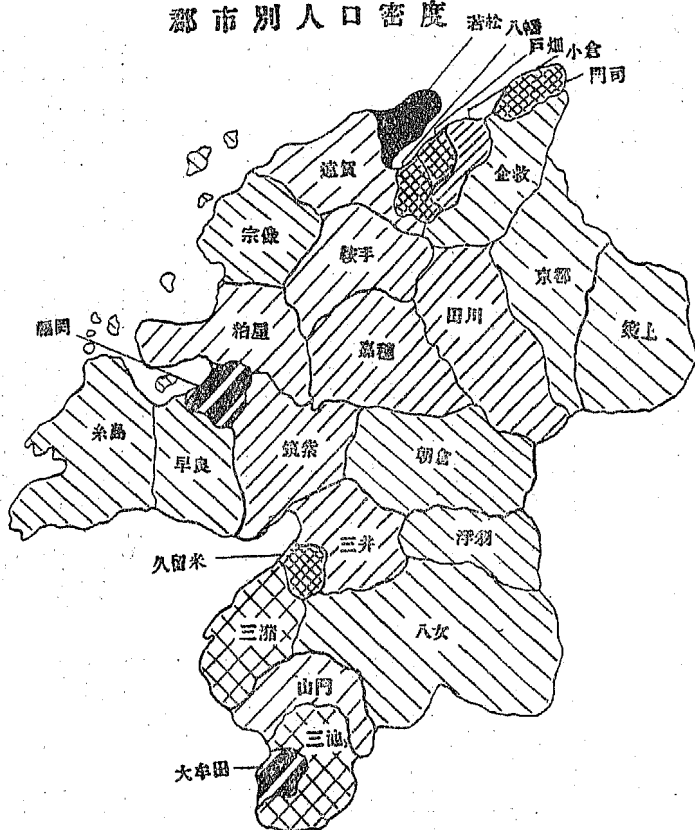
四、人口密度及其の分布

内地の地方別人口密度を見るに北海道は一方里に付四三七、東北一、四二七、關東五、九三四北陸二、四二九、東山一、八二一、東海四、二四〇近畿五、二〇二、中國二、五一二人、四國二、六〇八人、九州三、一三九、沖繩三、九九九、前回の調査よりも沖繩の外は何れも増加してゐる、本縣の人口密度は一方里に付七、二二人（一方料に付二四一人弱）で前の調査に比し一方里に付三五六人を増加して居る、之れを各府縣の密度と對照するに東京（三二、二二九）大阪（二六、四九三）神奈川（九、三二八）に亞いで内地で第四に位して居る、人口密度の高いのは概して其地の

地理的事情が人類生活に適せる事を示し、隨つて文化との關係も深い譯で、我が國に於ける等溫線圖で年平均氣溫の攝氏十五度線の通過せる地方は、最も人口密度の高い地帯であるから之れを我が國の文化地帯とすれば、本縣は正に長崎佐賀の兩縣と共にその東西地帯の西端に位置し、而も大阪以西での重心に當るものと考へられる。

縣内では筑前が一方里に付七、六一〇人で最高を示し、筑後之れに次ぎ七、四二一、豊前は六、一八九で最も低い、尙ほ之れを郡市別にして觀察すれば別圖の如く、最も稠密なのは若松の二二九、〇三七で大牟田の一三三、〇五三之れに亞ぎ、福岡の一〇八、八七八人、八幡の七七、〇六八人、戸畑門司久留米の五萬以上、小倉の五萬以下と云ふ順序になり、郡部では三潞の一、〇二一人三池の一〇、四六三山門の九、三〇四嘉穂の八、五六〇鞍手の八、〇七二田川、三井、遠賀、粕屋、筑紫は何れも五千人以上、五千人以上は浮羽郡外八郡で、密度の最も低いのは筑上

郷市別人口密度



事に氣が付く、然し郡市と云ふ様な比較的大きな行政區域を單位としたものでは、未だ斯る地

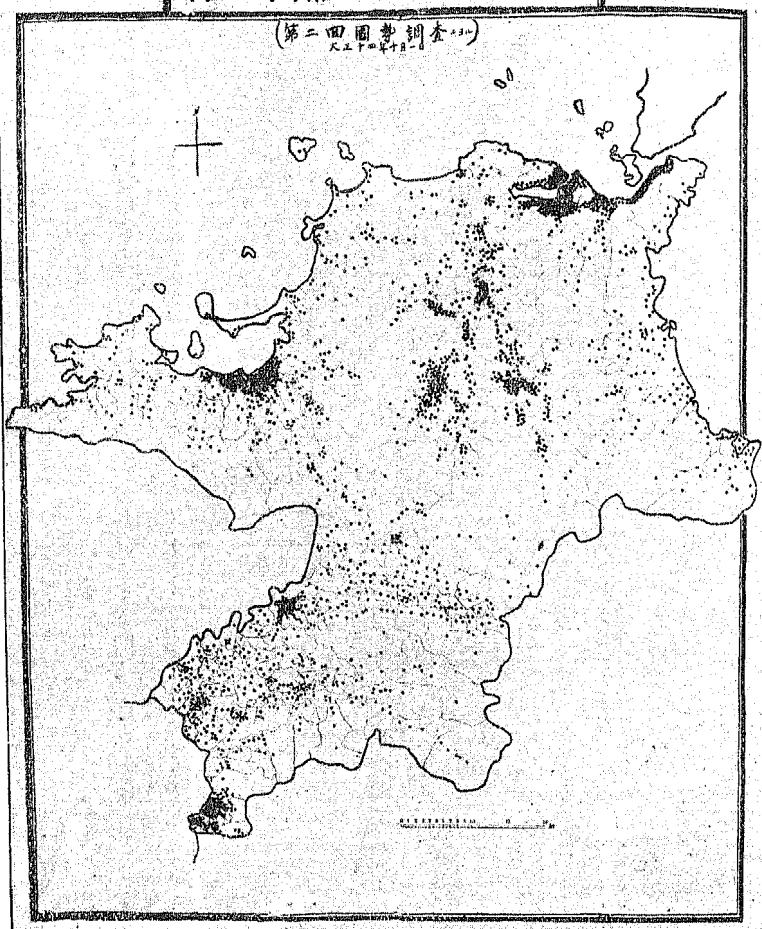
理的關係を考察するのには不便が多いので、筆者は本校の専攻科生を指導して別圖の如きドツ

の三、一〇一人である、而して縣の平均より高のは八市五郡で低いのは十四郡と云ふ事になる。

今之れ等を郡市別人口密度圖に依つて見るに、地理的關係並に産業交通發達の程度並に都市の有無等の事情に著しく支配されてゐる

福岡縣人口分布圖

(第二回國勢調査より)



●ハ人口1000人ヲ示ス。1000人未満ハ四拾五入

トマップを作
つて見た、尙
ほ別に町村を
單元としての
レヤーマップ
も作つて見て
居る、其の兩
方で互に缺點
を補ひながら
人口分布を充
分吟味して、
更に各種の地
理的要素に分
析せる分布圖
と對照しなが
ら其間の地理
的關係を考察
して、最後に
それ等を綜合
すれば比較的

眞に近い手ぬかりの少い地理的關係を説明認識する事が出来ると思つてゐるが、今回は單に其のプロセスとしてドットマップを紹介するに止めて他日を待ちたい。

尙は人口分布の地理的考察に必要とする本縣の各種分布圖は其の一部の略化したものを第九輯の地理教材研究に載せて居るから御批評を蒙り度い。

別 府 間 歇 泉

その詳細な研究はいづれ適當な學者によつて試みられるであらうが、まだあまり世間に知れて居ない様であるから、私は單に一瞥した時の模様を略報するに止めて置く。

場所は別府公園の西、八幡地獄のすぐ下にあつて板地八幡と云つて居る。附近には數多の噴氣孔があつて、例の花製造も盛んである。そこへ溫泉を得るつもりで鑿井をやつたら、思ひがけなくも間歇噴泉が出来たのである。

それは大正十四年の八月九日であつた。急に百數十尺の高さに熱湯を噴出した。そしてその

西 龜 正 夫

後約五六分毎に一回の噴出を繰り返して今日に及んで居る。尤も十五年の五六月頃梅雨の降り續くころには一時間一回位となり、八九月頃から又頻繁になつた。頻繁な時は二三十尺にしか噴き上らないが、回数が減じると百尺近くに噴き上げるのを常とする。

最初は井の深さも三四十間に過ぎなかつたが、噴出の勢が減じてはどの懸念から、次第に掘り下げて今は五十五間一尺になつて居る、私が見たのは昨年の十月であつたが、やはり五分乃至八分毎に噴出し、一日の回数二百五十回、